夢に咲く花

浅木　仰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢に咲く花

【Ｎコード】
Ｎ１４０４Ｐ

【作者名】
浅木　仰

【あらすじ】
魔法学園に通う少女、フローリア。
いつものように朝目がさめてみたら、あたまにお花がはえていたとしたら――？

1

めがさめると、おはながはえていました。

うららかな陽射しの日々は過ぎて、今はもう目覚めたときにはカーテンの隙間から、皓いひかりがさしこみます。

ゆっくりと目をあけたフローリアは、まどろんだままほんのりとほほえみました。

なんだかとても、しあわせな夢をみていたきがします。

ねむたい目をこすりながらなんとかベッドから離れてぺたぺたと洗面台に向い、からだを包む睡魔をおいはらうように、おもいきって冷たい水のしずくを顔にうければ、ようやく一日の始まりです。

ふるりと首をふって柔らかなタオルで水気をぬぐい、クセのついた髪の毛をとかそうと鏡をのぞきこんだ時――ふと、みなれた顔が映る鏡のなかに、見慣れないものをみつけました。

「…まぁ」

かくりと右に首をかしげると、鏡にうつる”それ”も右に揺れました。

左に首をかしげると、”それ”も左に揺れました。

「……おはな？」

そうです。

めがさめると、頭のちょうどてっぺんから、おはなが生えていたのです。

しぱしぱと瞬いても、てっぺんのお花は消えません。

そうっと伸ばした手で、あちこち気ままにはねる髪の毛をたどるとお花のくきに辿り着いたので、軽くひっぱってみることにしました。

「…いたいわ」

鏡の中で、フローリアの唇がへの字を描きました。
ちょうど髪の毛を引っ張ったのと、同じような痛さです。
上目遣いに鏡に映したお花を見ると、こまり顔の彼女の気もしらず、薄桃色の四枚の花弁は上機嫌に朝の風にゆられています。
いったいどうしたことでしょう。
夜眠る前には、たしかにいつもどおりでした。お花は好きですけれど、中庭や温室のお花の種を、あたまのてっぺんにまいた覚えはありません。
けれどたしかにいま、フローリアにはおはながはえていたのです。
「どうしましょう」
髪の毛ならば、切ってしまえば平気です。けれどおはなはどうなのでしょう。
さきほど引っ張ってみた時のことを考えると、まゆはハの字になりました。
なんだかとっても、痛そうです。
とりあえず、おはなの部分をよけてそうっといつものようにクシで丁寧に髪をとかします。

例えおはなが生えてきても、時間はまってくれません。
気がつけばもうすぐ、寮のあさごはんの時間です。ただでさえいつも人よりご飯を食べるのが遅いのに、何時もの時間よりおそくなったら、ごはんを食べ損ねてしまいます。
「それはこまるわ。お腹が空くと、悲しくなるもの」
声に出したことで、フローリアのこころが決まりました。
おはなが生えていても今のところ困ったことはありませんが、ごはんを食べ損ねるのは困ります。
うん。
鏡の中の自分に向ってこっくり頷くと、フローリアは急いで制服に着替え始めました。

ざわざわざわ。
寮の食堂はいつでも賑やかです。なんとかいつもより少しのんびり、くらいの時間で食堂にすべりこみ、朝食のトレイを手に空いている席に腰をおろそうと、となりの席の少年ににこりと笑いかけました。
「おはよう、ルーディ。おとなりにお邪魔しても良いかしら？」
「んぁ？よう、はよ…」
夢中でパンにかぶりついていた同じ寮の少年は、挨拶に顔をあげて少女の顔を見るなり、ぱかりと口をあけて、呆気に取られた顔で固まりました。
「ありがとう。何時もより遅くなってしまったから、ごはんの時間がなくなってしまうかもと思って、焦ってしまったわ。…ルーディ？どうかして？」
かたん。
椅子を引いて腰をおろし、ミルクのカップを手にほうと息をついて、食事の時間に間に合ったことに安心したように笑うと、ぼとりとパンを取り落とした事にも気付かずに少女をじっとみつめる少年に、不思議そうに首を傾げて聞きました。
「……あのさ、それ、新しい飾りか何か？」
かざり。ことりと首を傾げて少年の視線をたどると、どうやらおはなの事を言っているようです。
食事の時はフードを取るので（もっともおはなが生えていては、たとえ規則でもフードはかぶれなさそうですが）、今も少女のあたまのてっぺんには、亜麻色の髪におはなが上機嫌にゆれています。
はたりと手を打って、少女はころころと笑いました。
「いいえ、ちがうわ。あさ起きたらね、おはながはえていたの」

ふしぎでしょう？

少女の言葉に、少年はぱかりと口を空けたままうなづきました。
それはもう、不思議の一言ですませていいのか分らないくらい、ふ

しぎです。
けれど少女があんまり自然に笑うので、少年はそれ以上、何を言っていいのか分らなくなって、とりあえず口のなかにパンを詰め込んでみました。
ふわふわのミルクパンにマーマレイドのジャムをたっぷりのせてほおばると、口のなかに広がるあまいかおり。
まだまだ食べ盛り、育ち盛りの少年は、おはなを気にはすれども一度食事を再開するとそちらに一生懸命になってしまいました。
そうして無言でパンを食べてミルクを飲み、サラダとベーコンエッグを平らげておなかが落ち着くと、ようやく食事に集中していた口を開いていいました。
「まぁ…きれいだし、良いんじゃないか？困ったら先生に言ってみろよ」

じゃぁな。

さっさと食べ終えた少年はそう言って、サラダが口の中に入っていて喋れない少女がこっくりとうなづくのをみとどけると、満足そうにトレイを持って行ってしまいました。
しっかり三十回、ほろにがい緑の葉をかみしめて飲みくだした後に、少女はつぶやきました。
「そうね。先生に相談してみれば良いのだわ」
そうと決まれば、あとはお食事に集中できます。朝食の時間はあと２０分。
フローリアは最後の一皿、フルーツヨーグルトにとりかかりました。

2

おひるやすみの前。

四時間目の水晶占術の授業がおわると、ていねいにじぶんの水晶をいつも提げているきんちゃくにしまいこんで、フローリアはすこしだけ急ぎ足で教壇にむかいました。

「先生。お忙しい時にごめんなさい。少し、お時間をいただけますか？」

先生はきれいなぎんいろの髪を揺らしてふりむき、深いふかい藍色のひとみでにこりとほほえみました。

「もちろん、だいじょうぶよ。何かわからないことでもあったかしら」

ふんわりとつつこむ綿のようにやわらかな声に、いいえと首をふると、それにつられて一緒にゆれたお花にそうっと手をやり、フローリアは問いました。

「授業のことではないのですけれど、あさおきたらおはながはえていたので、どうしたらよいか先生にきいてみようとおもったの。ひっぱらなければいたくはないのだけれど、いったいどうしたら良いかしら？」

しんけんな顔をむけると、先生はほっそりとしたあごにゆびをあてておはなをながめ、ぱちりとまたたいて言いました。

「まぁ…めずらしい。夢見草ね」

「ゆめみ、そう？」

きいたことのないなまえです。きょとんとしてくりかえすと、先生はすこしわらって教壇のよこの本棚から図鑑をとりだし、ページをひらいてひとつの絵をゆびさしました。

「夢見草。とてもしあわせな夢を栄養としてはえる植物のことよ。花のいろや形はみた夢によってちがうの。夢見草がはえるのは、そ

の人にとってとびきり幸せなゆめをみた証(あかし)よ。ふつうは夢をみている間にはえて、目が覚めたときには枯れてきえているのだけど…きっと、ほんとうにしあわせな夢だったのね。だいじょうぶ、今日眠ってあすの朝目がさめたときには、きっと枯れてしまっているわ」
図鑑のおはなをじっとみつめながら、先生のはなしに耳をかたむけ、フローリアはようやく安心したようにわらって、はたりと胸の前でりょうてをあわせました。
「すてきだわ。せっかくの幸せな夢をおぼえていないのが残念だけれど、今朝はとっても良いきぶんだったの」
おぼえてはいないけれど、たしかにそれはしあわせな夢でした。先生がほほえむのにあわせて、おはなもよかったねというようにふわりとゆれます。

きれいなおはな。
みずをあげなくてもつちがなくても、しあわせな夢を糧に花ひらくそれが、あすの朝には消えてしまうのはすこし悲しい気もしますけれど、たとえおはなが消えてしまっても、フローリアはもう、それはそれはしあわせな夢をみたことをわすれません。

「先生。おしえてくださって、ありがとうございました」
ぺこりと頭をさげると、先生はいいえと笑ってフローリアをうながしました。
「さぁ、おはなは夢を糧にするけれど、私達には形のある糧が必要だわ。ランチに行きましょうか」
「たいへん。先生、いそぎましょ」

教科書をしまう先生をてつだって、ふたりは教室を後に食堂へと向かいます。
ふたりの足音にあわせて、初夏のひざしが作る影もふたつ、ろうかをおどっています。

それは、フローリアがわすれてしまった、それはそれはしあわせな夢によくにた光景でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1404p/

夢に咲く花

2010年11月26日00時03分発行